

「っと、いけねえ。校内は禁煙だったな……」

呟いて、取り出しかけたソフトパックを背広の内ポケットに戻す。

しかし煙草が吸えないとなると、どうにも手持ち無沙汰だ。仕方なく、何とはなしに窓際へと寄り、外を眺める。

昼休みだからか、校庭には食後の運動とばかりに遊んでいる生徒がちらほら見受けられた。

雲梯に登ったりぶらさがったりして戯れている男子達。

円陣バレーをしている女子のグループ。

手前隅のフェンスに取り付けられたバスケットゴールで、スリー・オン・スリーに白熱しているのは三年生だろうか？

ぐるりと見回していると、少し離れたところでサッカーに興じる男子生徒達の姿にふと目が留まる。

「サッカーか……懐かしいな」

生まれがブラジルというのもあって、小さい頃はよく孤児院仲間とサッカーをして遊んだものだ。

中でもラフプレーの多かったアイツは怪我が絶えなくて。その手当てをしているうちに、いつの間にか手馴れたものになっていて。

無茶ばかりするアイツをこれからも傍で手当てしていけるよう、支えていけるよう、どうせなら本格的に学んでみるのも悪くない、そう思って独学だが勉強を始めた。

それが医術を身に付けたきっかけだった。

でも、それから数年後、アイツは……

「……………」

懐古と共に苦い記憶まで呼び起こされ、モヤモヤとしたものが胸に込み上げてくる。

だが、その時――

「!?」

ガラ、と控えめにドアが開かれる音と同時に背後に感じた気配が、心を覆いかけていた暗雲をサッと掻き消してくれた。

入れ替わるように安堵が広がってきて、自然と口角が緩む。

ホッと静かに息をつくとき、恐らく眉をハの字に下げ、困ったような申し訳なきような笑みを浮かべた顔をドアの隙間から覗かせているであろう彼に、振り向きざまに言った。

「また、ですか？ デイノノ先生」



リボンさんと代理戦争のことで話し合っていて思いついた、デイノノが日中も沢田さんのサポートをしやすくするための計画。

それは『英語教師としてデイノノを並盛中に潜入させる』というものだった。

その際、身体の見える場所にタトゥーがあってはマズいので、そこを隠すために包帯を施すことにしたのだが、